

第 13 卷 編集後記

令和 6 年能登半島地震から 1 年以上が経過し、今回本雑誌の特集を組み、チーム恵寿 BCP の振り返りを記録に残すことになった。以下がこの特集において、執筆者に依頼した振り返りの内容であった。

- ① 平時と変わらず運用できたこと
- ② 平時のように運用できなかったこと
- ③ ②を平時の運用に近づける、または復旧するために行ったこと、得られた支援・連携
- ④ ③についてその成果とより安心できる医療を守るために何が必要だったか(院内の活動についての改善内容や院外からの支援など)。
- ⑤ 今後に向けてどんな準備が必要か。特に、今回は問題なかったが、もしより悪い状況であったらどうなっていたかということを想定して、今後の課題についても考察してください。

平時のように運用できない災害時に「平時と変わらず運用できたこと」という振り返りを求めるのは難しいところではあったが、それぞれの著者の文章から、医療を絶やさないために、あらゆる手段を使って、職員全体が格闘した姿が映像のように蘇った。そして、同じ法人にしながらそれぞれの活動について知らなかったこともたくさんあり、今回改めて医療を継続できたのは、チーム恵寿の皆の力が結集した結果であったと実感できた。

「スフィア (sphere)」とは、「球体」を意味し、地球上のいかなる場所においても適用できる災害時人道支援の国際的な基準であることを表していると聞いた。この「球体」という言葉は、BCP を実現するために奮闘してきた者として、別の意味でとても心にフィットする感覚であるように思える。それは、大災害対応は、患者・医療チーム・環境・目標が、線でも、面でもなく、球体のようにまとまらないと成り立たないものであるという思いを感じてきたからである。

スフィアのいう「ヒトが尊厳ある生活をおくることができる」ことを大災害被災地において実現し続けることは、生半可なことでは成り立たないことも経験することとなった。被災地では、「ニーズが少ないから」ということを理由にした「数」の論理も成り立たない。「災害関連死が減ってほしい」と願いながら、日に日にその数が増えていくことをとても残念に思う。被災者を救うことの限界を知れば知るほど、かならずしもメンタルモデルが一致しているとは言えない災害支援とのギャップにもどかしさを感じることは少なくない。その限界を克服するために何度も改訂を繰り返してきたスフィア人道憲章を共通認識として、被災者の状況・要望を中心においた復興が整っていくことを強く願う。

介護老人保健施設鶴友苑の古木恵実子事務長の報告の中で、「十分な環境ではないが(利用者に)喜んでもらえたことが本当に嬉しかった」という一文がとても心に残った。我々の仕事が医療サービスを受ける人たちとの相互信頼関係で成り立っていることを改めて教えてもらったような気がして、とても心が丸く温かくなるのを感じた。医療は人の心をスフィアにする力を持っていることが、私たちの仕事の希望である。

最後に、全国からいただいた温かい災害人道支援に、改めて心から感謝申し上げます。

2025 年 6 月吉日

恵寿総合病院医学雑誌 編集委員長
新井 隆成